



# 一段落



川崎ゆきお

「一段落すると行く場所があるでしょ」

「はあ」

「物事が一段落したとき、行くような場所です」

「ああ、あるような気がします」

「気ではなく、実際に行かれたことはありませんか」

「いや、意識したことはないけど、自転車でその辺を走ります。だから、特定の場所じゃないのかもしれない」

「自転車で走る？」

「はい、金魚鉢の中の金魚が大きな池で好きなように泳ぐような感じです」

「その場合は池ですか。一段落付いて行く場所は」

「私は金魚じゃないので、池というわけではありません。ただ、一段落付いたので、狭い場所から解放されて、好きなところを自由にウロウロしたいのでしょうねえ」

「ああなるほど、特定の場所を私は想定していました。私の場合は旅行なんですがね。自転車でウロウロと似ているかもしれません。ただ、行く場所は決まっているのです。お気に入りの観光地のお気に入りの旅館がありましてねえ。そこで一息つくのが私の流儀です」

「ああ、それはいいですねえ」

「若い頃からではありません。くたびれてきた青年になってからでしょうねえ。三十を超えたあたり。今この年代の人を見ると、子供に見えますよ。まだまだ青臭い。その頃から私は始めました。どんなに忙しくても、それが一段落付くと旅行へ出られると思い、頑張りましたねえ」

「そうなんですか」

「しかし、年を取ってから暇になり、物見湯山で方々へ出掛けるようになりました。それ以前に……」

「何ですか」

「一段落がなくなった」

「あ、はい」

「何処で段落を置くのかが怪しくなった。特に仕事はしていませんからねえ。頑張ったということもない。まあ、大病でもして、それが回復すれば、旅行にでも出ようかと思うのですが、そう言うこともありません」

「それで、その観光地の旅館はどうになりました。まだ行かれているのですか」

「退職後、あちらこちらの観光地を巡りましたよ。その中で、あの旅館も入っていますが、あまりよろしくありません。そういう気概で行ったわけじゃありませんからな。有難味がありやしない」

「でも、そうして遊んで暮らせるのは良いことじゃないのですか」

「いやいや、そうではありません。やはりメリハリが必要なんでしょうなあ。苦しい仕事をこなすとか、忙しい日々を送るとか、そう言う溜が必要なのですよ」

「溜ですか」

「そうです。あなたのように一段落付けば自転車で飛び出し、その辺りをうろついて帰って来る

。これでいいのかもしれませんがなあ。あまり大技を使わないで」

「旅行はやはり大技ですよね」

「そうだね。たまにだからいいのだし、やっと思けたから良いのしょうなあ。いつでも行けるのなら、繰り返しますが有り難くも何ともありゃしない」

「やはり苦勞も必要というわけですね」

「数倍、効果が違います」

「はい」

了